

C H O O S E

C I V I L I T Y

結局うまくいくのは、

礼儀正しい人  
である

P・M・フォルニ  
大森ひとみ 監修 上原裕美子 訳

 Discover

CHOOSING CIVILITY by P.M.Forni

Copyright © 2002 by P.M.Forni.

Japanese translation rights arranged with  
P.M.Forni c/o Lark Productions, New York  
through Tuttle-Mori Agency, Inc., Tokyo

# はじめに

二十一世紀となった今、礼儀正しきとは、どういう意味を持つのでしょうか。

礼節とは、どのように身につければいいのでしょうか。

礼節によって、人生のクオリティはどのように上がるのでしょうか。

そもそも、友人や同僚、周囲の人に対して、どう振る舞うべきなのでしょうか。

いつどんなときでも礼儀正しくしなければならぬのでしょうか。

無礼な態度をとられたときには、どう対応すればいいのでしょうか。

いったい礼節とは何でしょうか。

本書は、こうした疑問に答えるものです。

礼節について語るのは誇らしいことですが、同時に責任の重さを感じますし、勇気のあることでもあります。遠回しに「私は非の打ちどころのない礼儀正しい人間だ」など

と言っているとも思われたくはありません。

哲学者のセネカは、彼が説く高尚な哲学と、彼自身の決して完璧とは言えない行動について、読者が矛盾を感じるのではないか、という懸念を持っていました。それに対する答えとして彼は「自分は美德について書いているのであって、自分自身について書いているわけではない」と述べています。そして「不道徳を糾弾する際は、最初に自身身の不徳を糾弾する」とも述べています。

私も、本書で書き、授業で教えているような礼節ある行動を実践しようと心がけていますが、セネカと同じく完璧な人間ではありません。至らぬところも多々あります。それでも本書を書いたのは「**礼節は人生のクオリティを高めるすばらしく効果的なツールだ**」という胸躍る気づきをお伝えし、共有したいと思ったからです。

多くの読者にとって、本書が提示するのは、わかりきった内容ばかりかもしれない。しかし、すでによく知っていること、もともと大事にしている考え方であっても、あらためて確認すれば、その規範を守ろうという意識が強くなります。わかっていることを再確認するのは、新しい視点を持つと同じくらい重要なことなのです。

ページをめくっていくうちに、私が感じたのと同じ、胸躍る気づきの感覚を抱いていただけだと思います。私も執筆しながら多くを学びました。執筆当初と今とでは、自分がちがう人間になったように感じています。

読書のなかには「考えるための読書」もあれば「頭をからっぽにするための読書」もあります。

後者の読書は楽しいですが、たいていの場合、遊園地の乗り物に乗ったときのように、読み終えたあと最初と同じ場所に戻っています。課題が見つかることもなければ、自分が変わることもありません。

「考えるための読書」は努力が必要ですが、成長を促してくれます。本書も、ぜひ考えながら読んで、よい変化をもたらすためにお役立ていただきたいと思っています。

新しい家を買う前には、あらゆる細部を確認し、その家で暮らしたらどうなるか、じっくり雰囲気味わうものです。壁の装飾に指をすべらせたり、手すりにさわってみたり、気に入った部屋を歩き回ってみることでしよう。幸せな人生をもたらす新しい家を歩き回るような気持ちで、この本の中をめぐってみていただきたいのです。

どうぞ、ゆっくり読んでください。ページを繰りながら、ただ想像するだけでなく、自分の体験として取り込み、実際に実践してみてください。

ルネッサンス期の絵画で本を読む人物の絵がありますが、あんなふうにしおりがわりに指をはさんだまま読書を中断して思いを馳せ、人生を新しい視点で見つめ直す——そんな読み方をしていたのが理想です。

本書がそうした読み方をされるに値するものであることを祈りつつ。

結局うまくいくのは、礼儀正しい人である

## 目次

はじめに

3

## 第1章

# 礼節

## —— 人生の質を高める技術

他者とともによく生きるために

..... 14

人は人の中で生きることと磨かれる

..... 18

礼節とは永遠に色あせない不変の原則

..... 23

愛とは礼節の先にあるもの

..... 25

自制する心がよりよい未来を作る

..... 28

礼節は成功のために不可欠な人生の部品

..... 32

人とのつながりが健康を守る

..... 34



## 第2章

# 礼節のルール 25

〔ルール01〕	周囲の人に関心を向ける……………	40
〔ルール02〕	あいさつをして敬意と承認を伝える……………	44
〔ルール03〕	相手をいい人だと信じる……………	48
〔ルール04〕	人の話をきちんと聞く……………	52
〔ルール05〕	排他的にならない……………	58
〔ルール06〕	親切な話し方をする……………	63
〔ルール07〕	そこにいない人の悪口を言わない……………	68
〔ルール08〕	ほめ言葉を贈る。そして受け入れる……………	72
〔ルール09〕	NOの気持ちを察し、尊重する……………	78
〔ルール10〕	人の意見を尊重する……………	83
〔ルール11〕	身だしなみと仕草に気を配る……………	88

〔ルール12〕	人と協調する	95
〔ルール13〕	静けさを大切に	101
〔ルール14〕	人の時間を尊重	105
〔ルール15〕	人の空間を尊重	109
〔ルール16〕	真摯に謝罪	115
〔ルール17〕	自尊心を持って自己主張	120
〔ルール18〕	個人的なことを質問しない	126
〔ルール19〕	最高のおもてなし	133
〔ルール20〕	配慮ができる客になる	139
〔ルール21〕	お願いするのは、もう一度考え直してから	144
〔ルール22〕	無駄な不満を言わない	151
〔ルール23〕	前向きに批判し、受け入れる	158
〔ルール24〕	環境に配慮し、動物にやさしく	164
〔ルール25〕	人のせいにならない	172

### 第3章

# 人はなぜ礼節を見失うのか？

親しみのカルチャーもときと場合をわきまえて ..... 182

過度の「ルール破り称賛」は考えもの ..... 184

権威の消失が礼節の危機を招く ..... 186

都市生活の無名性が人間関係を不安定にする ..... 188

平等社会と礼節軽視のつながり ..... 191

自己実現の時代のメッセージ ..... 193

本当に礼節は失われつつあるのか？ ..... 197

よく生きるために、私たちは何をなすべきか ..... 201

監修者あとがき ..... 208



# 礼節

人生の質を高める技術

## 第 1 章

## 他者とともによく生きるために

「人生には大切なものが三つある。

ひとつは、人に親切にすること。

もうひとつは、人に親切にすること。

そしてもうひとつは、人に親切にすること」

——ヘンリー・ジエームズ(作家)

「私たちはヒーロー不在の時代をさまよっている。

信頼できるリーダーは見当たらず、

追いかけるヴィジョンも、貫く信念もない。

道徳は絶えず揺れ動き、誰もが自分のルールを作って、

都合よく書きかえたりする。それが、現代の私たちの姿だ。

正しいことをなす勇氣など、いったいどこで見つかるというのか」

——ジェイスン・ダーク（ピーター・ガドルの小説『長い雨』の主人公）

ピーター・ガドルの小説『長い雨』を読んで、この文章に出会ったのは、人々が新しい世紀の到来を祝おうとしていた頃のことでした。この文章は、当時の私たちの多くが抱いていた言い知れぬ不安感をみごとに表していました。

ガドルのメッセージは二十世紀の終わりについて書かれたものですが、新しい世紀が始まった今でも、変わらず射えています。

伝統的価値観が崩れたあと、新たな価値観を見つけるのは容易ではありません。自分はこの世界でよい市民といえるのかどうか、その判断基準をどこで探したらいいのか、私たちはわからずにいます。

それでも私たちは、何らかの原則に沿って、じゅうぶんな自信とともに、ときにはものごとくにYESと言いつつ、ときにNOと言わなければなりません。現代の複雑さに立ち向かうために、私たちは原則を持たなければならぬのです。

自分が正しい原則に沿っているかどうか、自分自身が価値ある人生を送れているのかどうかを計る“ものさし”とはなんでしょう。それは“日々、周囲の人々とのように接しているのか”つまり、他人に対する行動や態度が基準となるのではないかと私は考えています。

周囲の人の人生から負担を減らせているなら、それはよい行いをしているということ。反対に、苦しみを増やしているとしたら、それはよい行いをしていないということ。単純ですが、筋の通った正しい原則と言えるのではないのでしょうか。

人生は他者とのふれあいによって決まるもの——私はそう信じています。よい人間関係に恵まれれば、人生は輝きます。人間関係が損なわれると、人生も損なわれます。幸**せ**になりたいなら、**他者ともによく生きる方法を学ばなければなりません**。そのカギを握るのが「礼節」なのです。

礼儀正しくしていれば、他者とうまくふれあうことができます。私たちは礼節ある生き方をする事によって、思慮深い心を育て、自己表現とコミュニケーションの力を伸ばし、さまざまな状況におだやかに対応できるようになります。



人はばらばらに孤立して存在しているのではなく、他者とのふれあいの中で生きるものです。ふれあいの中で自分のアイデンティティを認識します。生きるというのは、人とかがわっていくことなのです。

他人から「おまえは利用してもいい存在、ひどい仕打ちをしてもいい存在だ」という目で扱われると、自分自身を見る目に、そういう意識が入ってきてしまいます。

反対に、やさしきを持って扱われると、存在を認められていると感じます。やさしきに満ちた行いからは、とてもシンプルでパワフルなメッセージを感じることができるとです——私はひとりじゃない、私には価値がある、私の人生には意味がある、と。

## 人は人の中で生きることとで磨かれる

私は長年、礼節をテーマにした講義やワークショップを行ってきました。ワークショップでは「礼節とは何を意味するか」について、参加者の考えを書いてもらうことがあります。これまでの主なものを挙げてみましょう。

- ・ 他人への敬意
- ・ 気がきくこと
- ・ 誠実であること
- ・ 礼儀観を持つこと
- ・ 正直であること
- ・ きちんとしたテーブルマナー
- ・ 節度を持つこと
- ・ 大人のおふるまい

- ・やさしき
- ・傾聴すること
- ・行儀
- ・同情すること
- ・寛容になること
- ・人あたりがいいこと
- ・公平であること
- ・人に尽くすこと
- ・慎み
- ・フレンドリーな態度
- ・自制心
- ・人に手を貸すこと
- ・正義
- ・作法を守ること
- ・忍耐強いこと
- ・決まりを守ること
- ・無私
- ・よき市民でいること
- ・エチケット

このリストから浮かび上がってくるのは、こんな結論です。

- ・礼節とは、複雑なものである。
- ・礼節とは、よいものである。

- ・ 礼節とは、ていねいに、礼儀正しく、行儀やマナーを守ることである。
- ・ 礼節は哲学や倫理学の領域にあるものである。

私はこの四点に沿って、本書を書きました。

礼節ある人間でいるということは、つねに他人の存在を意識して、その意識のすみずみに寛容さと敬意と配慮を行き渡らせることです。礼節とは善意の表れです。誰か個人に親切で配慮ある態度をとるだけでなく、地域や地球全体のすこやかさに関心を持つことでもあるのです。

礼節あるふるまいとは具体的には以下のようなものです。

「お願いします」や「ありがとう」を言う。

誰かをおどろかせたり静寂を乱したりしそうなときは、声をひそめる。

公共施設の改築のため、寄付をする。

初対面の人が会話に入れるようにする。

新しく引越してきた人を歓迎する。

理解して力になろうという気持ちで、他人の意見を聞く。

自分とちがう考え方の人にも敬意を払う。

トラブルにも広い心で対応する。

誰かが投げ捨てたゴミをゴミ箱に入れる。

危険な産業汚染物を正しく処理する。

あやまちを認める。

悪意のあるうわさ話に加担しない。

コーヒーポットの最後の一杯を注いだら、新しいコーヒーを淹れる。

運転中はきちんとシグナルを出す。

バスの中で席を譲るべきときは、いつでもためらわず立ち上がる。

飛行機の座席を倒すときは、うしろの人に断る。

道に迷っている人がいたら、足を止めて教えてあげる。

赤信号で停止する。

反論するときにはけんか越しにならない。

議論に負けたときはいさぎよく引く。

礼節（＝Civility）という言葉の由来は、都市（＝City）と社会（＝Society）という言葉にあります。ラテン語で「市民が集まるコミュニティ」を意味する言葉「Civitas」から来ています。Civitasは文明（Civilization）の語源でもあります。

礼節という言葉の背景には、都市生活が人を啓蒙する、という認識があるのです。**都市は人が知を拓き、社会を築く力を伸ばしていく場所**なのです。人は都市に育てられながら、都市のために貢献することを学んでいきます。

礼節とは「よい市民になること」「よき隣人であること」を指しているのです。

## 礼節とは永遠に色あせない不変の原則

「共感とは、人間の最も深い欲求に光をあてるものだ。

人間が生き残れるかどうか、それは他人のことを正しく理解し、こまやかに対応していく能力の有無にかかっている」

——アーサー・C・シアラミコーリ（臨床心理学者）

礼節ある行動をとるということは、他人の気持ちに共感する練習でもあります。自分の行動がどんな影響をおよぼすかを予想する”という習慣が身につく、責任感と心くばりをもって行動できるようになります。

礼節ある生き方を選ぶということは、他者や社会のために正しい行動を選ぶということです。他者のために正しく行動すると、その副産物として人生が豊かにふくらむので

す。「他人に親切にするのはよいことである」——この真理は永久に色あせません。

現代の私たちは、極端な個人主義と相対主義の時代に生きています。人生に意味のある一貫性が感じられず、落胆することも少なくありません。電子メディアが年中無休で発信する情報の多さと多様さにめまいを起こし、茫然としてしまうときもあります。

しかし、絶望と無関心に飲み込まれる道しかないわけではありません。前章で紹介した小説家ピーター・ガドルの表現を借りれば「自分の都合で決めたり書きかえたりするルール」だけが、生きていくための唯一の教科書ではないからです。人々と結びつく力が人生のクオリティを決めることを思い出し、その理解にもとづいた行動をすることもできるのです。

友好的で思いやりで満ちた人間関係は、幸せな人生を育ててくれます。そうした人間関係を築くためにも、互いに礼節をもって、ごく自然に尊敬と配慮とやさしさを示し合うことが必要なのです。



## 愛とは礼節の先にあるもの

「人間は何を求めているのか」——この問いに対して精神分析学者ジークムント・フロイトは、「人は幸せを求めている、幸せであり続けたいと思っている」と言っています。フロイトは幸せをおびやかすものを列挙しました。人は病気のせいで不幸になることもありますし、自然の脅威のせいで苦しみを強いられることもあります。フロイトによると、**何よりつらい不幸の原因は、他者との関係性で生じるものです。**

ふたりの人間がいて、りんごがひとつしかなかったとすると、半分をもうひとりに分け与えなければなりません。あるいは、相手がりんごを全部食べてしまう可能性もあります。こうした文脈では、他者の幸せとは自分の幸せの終わりを意味することになります。

しかし同時に、他者は幸せの源にもなり得ます。

傷つくのを避けて他人を寄せつけないのは無意味です。人間関係が引き起こす痛みを最低限にする努力をしながら、人間関係を築いていく方法を学ぶべきなのです。

人間関係によって生じる痛みを最低限に抑える方法とは、他人と上手に接していけるようになること”です。この大切な素養を身につけるのに、魔法を学ぶ必要はありません。礼節を学べばいいのです。**礼節は人間関係の痛みの予防薬でもあるのです。**

レベッカ・ウェルズの小説『ヤアヤア・シスターズの聖なる秘密』の主人公シツダは、母ヴィヴィから辛辣な手紙を受けとります。そこには、こんな言葉が書かれていました。「愛なんかどうでもいいから、マナーくらい守りなさい」

捨てばちな言い方には賛成できないのですが、それでも、この台詞は心に刺さります。ヴィヴィの台詞が私の胸に響く理由は「愛とは、最初からもっているものではなく、たどりつくもの」と語っているからです。

ものごとには順番があります。まずは、自分中心の意識を抑えること。そのうえで、本当の愛を理解するチャンスがやってきます。**まずは行儀作法、その次に愛なのです。**

行儀作法の練習を通じて、赤の他人を含め、他者を自分自身と同じに愛せるようになる人もいるでしょうし、愛情の範囲が家族と友人に限られる人もいます。しかし行儀作法こそ、愛を知るための最初の一步です。その方法は、誰もが多少なりとも身につけられるはずです。

## 自制する心がよりよい未来を作る

「無作法とは、弱い人間が強さをよそおうことだ」

——エリック・ホッファー（社会哲学者）

自己表現したい気持ちがあるのは、人として自然なことです。人は自己表現すべき、と言えるかもしれませんが。考えや気持ちを前に出して行動するというのは、好ましく健全な行為です。

しかし、表現したいことすべてがそれに値するとは限りません。自己表現が身勝手なものとなることも少なくありません。衝動的行動が自己表現と称される場合もあります。それは無責任な自分勝手です。まずみじめな結果を招きます。

人生のどんな場面においても、行動を起こす前に立ち止まり、考えるという選択肢があります。それは、みなでお酒を飲むときにも決してアルコールを口にしない運転手を心の中に住まわせておくようなものです。そして、必要なときにその運転手を呼び出す力を、人は学んで身につけることができます。

行動する際には、一瞬の間を置いて、自分にこんな問いを投げかける習慣を身につけましょう。こうした自問自答は、健全な判断をする助けになります。

- ・自分は本当にこれをしたと思うだろうか？
- ・これをしたら誰かを傷つけることにならないだろうか？
- ・これをしたことで未来の自分はよろこぶだろうか？

自制心とは、どんな行動をするときにも思考と配慮の余地を持つことです。自制心を持つと、今この瞬間の満足は得られなくても、五分後、明日、あるいは来年に気分がよくなる行動を選ぶことができるようになります。つまり、**自制心とは、あとでうれしくなるための技術**なのです。

以前、イタリアで妻と一緒に列車に乗っていたとき、高校生の騒々しい一団に遭遇したことがあります。私はいずれ彼らが静かにするのを期待して、十分ほど、居心地の悪い思いで黙って待ちました。

周囲を無視した騒ぎはほほえましいと呼べる限度を超えていたのですが、私が怒りを爆発させそうになった理由は、引率の教師たちが黙認していたことでした。ほんの一瞬ながら、生徒と教師の両方をどなりつけたい気持ちになりました。でもそうしませんでした。あとで悔やむのがわかっていたからです。

私は努めて冷静さを保ち、静かに、けれど断固とした口調で、通路をはさんで座っていたふたりの学生に「妻と話をしたいので、少し声を抑えてもらえないだろうか」と頼みました。叱りつけずに要望を伝えて、対応するのは彼ら自身の責任に任せたのです。

ほかの生徒と教師にも私の声は聞こえていました。気まずい笑い声がして、わざと立てたらしい大きな物音もしました。それでも、高校生の態度は変化しました。しばらくして彼らは静かになり、列車がローマに着いたときには、よい旅を祈って別れの挨拶を交わすことができました。

この一件をうまく解決できたのは、自制心があつたからです。それは私の自制心であり、高校生たちの自制心でもありました。

礼儀正しくするのは自分らしさを捨てることではないか、と言う人もいますが、私はそうは思いません。**礼儀正しくすることは、ある面の自分らしさを抑えながら、別の面の自分を出すこと**ではないでしょうか。自己表現を控えたと感じたとしても、同じくらいに自分を表す行動をしているのです。

本当の礼儀は人生を損なうものではありません。むしろ、正しい行動を選ぶことで満足を積み重ねることになるのです。礼節は人生のクオリティを高める手助けとなるものなのです。

現代社会では自尊心の大切さが強調されがちです。しかし、自尊心ばかり重視して育てると、自分のことしか考えられない人間になってしまいます。

自尊心が大きく肥大した若者は、目先の欲望を抑えるのが下手なものです。そのせいで他人に親切に礼儀正しくしたり、やさしくしたりすることができずにいます。大人が作り上げたナルシステイックな檻に閉じ込められているようなものではないでしょうか。

## 礼節は成功のために不可欠な人生の部品

完璧とは言えないこの世界で、礼儀正しさの出る幕などない——そんなふうにしていては、立場が弱くなり押しつけられてしまう。だから、思いやりの気持ちなどわきへ置き、決して手加減せず、自分の得になることを追求せよ、と。

そうした態度を否定するつもりはありません。それで成果が出るかと問うならば、答えはYESでしょう。たしかに短期的には結果が出やすくなります。質問したいのは別の問題です。あなたはそういうやり方で勝ちたいと思っっているのでしょうか。そういうやり方で勝ち続ける自分を想像できるでしょうか。

「正直者はばかを見る」という表現がありますが、そんなことはありません。正直さと誠実さは、人生の成功に不可欠な部品のようなものです。



人が自らの価値観を形成していくにあたって、まちがいをなく取り入れるべき要素のひとつは「誠実であることが大切」という価値観なのです。

礼儀正しさには、自由と拘束の両方が伴います。なぜなら、人は他人に親切にすることで、自分も親切にしてもらえることを願うからです。自分中心の意識を少し放棄して、相手も同程度には譲ってくれると期待するのです。

つまり、**礼節を守ることは「社会というデリケートなゲームで、全員が気持ちよくいられるようにしよう、とおだやかに圧力を加える行為」**と行うことができるでしょう。

残念なことに多くの人は、礼節を学び実践することのメリットを想像できずにいます。そして、人生のクオリティを高める貴重な力を利用しようとしません。

行動としての礼節には、学んで身につけることのできるルールがあります。実践の中でフレキシブルにルールを改善していくことも許されています。

礼節を守ることのメリットと、それを日常生活に取り入れていくベストな方法を、この本で知っていただきたいと思います。

## 人とのつながりが健康を守る

「自分は誰かと親しいと感じている人は健康になりやすい。

病気になる危険性は著しく低く、

病気になったとしても、生存の確率はきわめて高い」

——ディーン・オーニッシュ(医学博士)

一九五〇年代初期、ハーバード大学で行われたある研究で、健康な若い男子学生二クラスを対象にアンケートで両親との仲を調べました。

三十五年後、彼らの医療記録を調べたところ、両親と仲がよくないと答えた学生の一〇〇%が心臓病や十二指腸潰瘍など、重い病気と診断されていました。一方、両親と良好で温かい関係を維持していた学生では、そうした疾病にかかったのは四七%でした。

一九六五年、心身医療分野のパイオニアであるリサ・バークマン博士の研究では、カリフォルニア州アラメダ郡の男女数千人の社会的結びつき（配偶者の有無、交流関係、教会への参加など）を記録し、九年後に、この回答者の健康状況を調べました。

その結果、孤独な生活をしていた回答者の死亡率は一・九から三・一倍も高かったのです。その後も数年間にわたってさまざまな調査が行われ、**社会的結びつきの欠如は健康に著しいリスクとなる**ことが判明しています。

一九九〇年代、カーネギー・メロン大学のシエルダン・コーエン博士の研究では、十八歳から五十五歳の健康な志願者二百七十六人から、社会的交流の範囲を聞きとりました。次に、同じ被験者にライノウイルス二種類のうちどちらかが含まれる点鼻薬を与え、ウイルスが引き起こす風邪の症状の発生を監視しました。

いずれのウイルスを接種した場合でも、交流範囲の広い被験者は風邪に対する抵抗力が強いことがわかりました。六種類以上の社会的結びつきがあると、一から三種類の社会的結びつきしかない場合とくらべて、風邪に四倍強いという結果が出ました。

オハイオ州立大学のジャニス・キーコルトーグレイザー博士は「別居または離婚した男性は、結婚している男性とくらべて健康ではない」という研究結果を発表しました。また、結婚生活が安泰でない男性は、免疫系が弱いことも発見しました。夫と妻の対立は、明らかに健康に悪影響をおよぼします。

さらに別の研究では、結婚して数十年になる夫婦を調査したところ、ひんぱんに口論する夫婦は、口論の少ない夫婦とくらべて、免疫系が弱いことがわかりました。

こうした研究からわかるように、健康でいるためには、他者とつながる必要があります。**他人と交流する能力は、まちがいでなく健康を左右します。**つまり、礼節を守るのは気分がよくなるからだけでなく、健康のためでもあります。言ってしまうと、人を大事にすることは自分を大事にすることなのです。

また、健康でいるためには、人生に目的や意味を感じられなくてはなりません。そして、人生の目的や意味は、かならず他者の存在と結びついています。やはり、身のまわりにいる人を敬意と配慮をこめて大切に扱うことが重要になるというわけです。

特に人生の後半戦には、人間関係の力が大きな支えとなります。仕事をしているあいだは、好むと好まざるとにかかわらず、多くの人とつき合わざるを得ません。けれど仕事が生活の中心でなくなると、仕事の縁だけでつき合っていた人は去っていきます。

しかし、あなたがやさしさと心くぼりのできる人間なら、仕事をやめても一緒にいたいと思ってもらえるでしょう。気づかひや思いやりの輪が続けば、それはお互いにとってよいことなのです。

だからこそ、やはり礼節を学ぶ必要があります。学べば学ぶほど、礼節は利他主義と利己主義の自然な共存状態を生み出すということが、はつきりとわかってくるでしょう。

